

認識と言語・言語と認識を考えるために

原 口 庄 輔

1. はじめに

最近は、言語学でも至る所で「ニンチ、ニンチ」と喧しい。「ニンチ、ニンチ」と言い続けたせいかあらぬか、最近やっと認知されてきたようだ。慶賀すべきことと言えよう。認知文法というと新しいような印象を受けるかも知れないが、そもそもことばを用いるときは認識のあり方と全く無関係にあり得るはずがないし、これまで、「認知」と表だって言うか否かは別にして、どの理論でも少なくともそれを前提にしてきたと言えよう。世の中のかなりの認知文法は、生成文法に対立するものとして、「認知文法」があると主張しているが、大津（2000）のように、生成文法こそが由緒正しい認知文法・認知科学であるとする立場も見られる。

言語を用いる際には何らかの認識があることは否定しようがないであろう。したがって、言語と認識は全く無関係であると主張する人はないであろうから、ここではその立場は考慮に入れないとする。言語と認識は何らかの関係があるとした上で、言語と認識の関係を考えると、その関係は次の3つになるであろう。

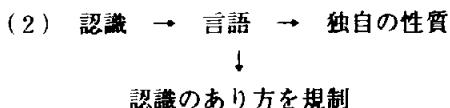
（1） 認識と言語の関係

- a. 言語と認識は独立している。
- b. 言語は認識に依存している。
- c. 認識は言語に依存している。

（1a）の立場は、基本的にチョムスキーの立場である。言語の使用（use）はともかく、脳の中の言語の知識（knowledge）としては、認識とは独立したシステムからなっているという立場である。これに対して、（1b）は様々な「認知文法」の立場である。（1c）は、「認知文法」家はおそらく否定するであろう

し、今のところだれも表だって主張する人はいないようだ。かつてサピアやウォーフの立場がおそらくこの立場に近いであろう。いわゆるサピア・ウォーフの仮説と言っていたものには、「新英語学辞典」の説明によれば、(1c)が含まれていると言ってよい。さらに、同様の考え方には、ボアス (F. Boas) やもっと遡ってはフンボルト (W. von Humboldt) に既に見られるという。

ここでの立場は、言語と認識の関係は、(1)の3つがすべて関与しているというものである。すなわち、もともとは、言語は認識に依存していただけでなく、言語の使用の際には認識に基づいて使用されるのが通例である。しかし、言語は知識としては認識と独立したシステムを形成し、逆に言語が認識のあり方に影響を及ぼす面もある、というのがその主張である。この主張を図式的に示すなら、およそ次のようになる。



以下の議論ではこの主張が正しい認識であることを示すことがある。当然のことながら、認識のシステムには、言語と独立の側面がある。ある現象を認識してはいるが、言語で表せないことがあることとか、絵や音楽や身振りなどでは表せるが、言葉では表せないものがあることとか、型による武道の継承などを考え合わせれば、言語とは独立した認識の面があることは明らかであろう。

にもかかわらず、認識と言語は独立していると同時に、相互に関係している面が多いことも明らかである。生成文法の主張である「言語は独立のモジュールをなしている」という主張と、いわゆる認知文法の「言語は認識に依存している」という主張は、必ずしも相反するものではない。現象をとらえるレベルが違うだけである。

2. 認識と言語

既に見たように、言語と認識が関係していること自体はだれも否定しない。語彙のレベルでも文のレベルでも談話のレベルでも、一定の関係が成立している。

例えば日本語では、自己 (ego) を表す場合、その認識のあり方によって、

「わたくし」と認識するか「僕」と認識するか「先生」と認識するか「お父さん」ないしは「パパ」と認識するか、その他様々な認識の仕方によって、言語表現が変わってくることは、従来よく知られたことであった。他人を認識する場合も「赤の他人」と認識するか、「お姉さん」と認識するか、「おばさん」と認識するか、「おばあさん」と認識するか、あるいはその他の認識をするかによって、表現が変わることも自明のことである。

場所の関係を表す「右」や「左」のような表現の場合も、ある状況の認識の仕方によって、次のような2つの言い方ができる。

- (1) a. 太郎の右に花子がいる。
 b. 花子の左に太郎がいる。

しかも、この場合、視点をどこに置くかによって状況が変わってくる。例えば、太郎の側に立っての表現であれば、(2)のような関係になっている。

- (2) 話者
 花子 太郎

ところが、太郎と花子に向かって少し離れたところから(1a)のように言う場合は、(3)のようになっている。つまり、話者から見て「太郎の（向かって）右に花子がいる」と認識している表現である。このような状況を話者中心に表現するか、対象を中心表現するかは様々である。例えば、(4)に示すような状況を述べる際に、話者の側に立って認識するか、(2)と同様に対象の側に立てて認識するかは、言語によって異なるようである。

- (3) 太郎 花子
 ↑
 話者

- (4) 花子 太郎
 ↑
 話者

(1b)もこれと並行的で、現象を認識する際の視点が花子の側にあれば、(5)のような状況を表している。

(5) 話者

花子 太郎

これに対して、二人に向かって少し離れて話者の視点から認識して言う場合は、(6)のような状況になる。

(6) 太郎 花子



話者

このような状況に関して、整理すると、次の2つの可能性があり、表現のあり方は、言語（及び認識）の仕方によって異なる。

- (7) a. 二人に関して話者の側から見たとき、どのように言うか。
 b. 二人のいずれかの側から見たとき、どのように言うか。

しかも、「AがBの右（左）にある」というような場合、AとBの性質によって、可能性が異なる。例えば、次のような場合を考えてみよう。「タンス」と「ボール」のような場合は、(8)のように認識して言えるが、(9)のようには（特別の場合を除いて）言わないので普通である。

- (8) a. タンスの右にボールがある。
 b. タンスの左にボールがある。

- (9) a. #ボールの右にタンスがある。
 b. #ボールの左にタンスがある。

同様に、動かない建物の郵便局と動く「車」のような場合も、(10a)のように認識して言うのが普通であって、(10b)のようには普通は言わない。

- (10) a. 郵便局の右に車が止まっている。
 b. # 車の左に郵便局がある。

しかも、(8)や(10)のような場合は、話者の視点からの認識しかしないので、話者の側から見て、右か左という状況しか通例はない。

これと逆なのが、内裏雛のような場合で、内裏雛（天皇あるいは皇帝）の視点からの位置づけがなされ、(11)のような関係になる。

- (11) 男雛 右側に位置する。つまり、向かって左に位置する。
 女雛 左側に位置する。つまり、向かって右に位置する。

同様に「右近の橋」「左近の桜」のような場合も内裏雛のいる紫宸殿の側からの視点に則った言い方である。

- (12) 右近の橋： 紫宸殿に向かって左側に植えたタチバナ。平安時代に右近衛府が管理した。
 (13) 左近の桜： 紫宸殿に向かって右側に植えたサクラ。平安時代に左近衛府が管理した。

これと並行的に、「左大神」「矢大神」の場合も、神社の本殿の側からの視点になる。

- (14) 左大神： 神社の隨身門に安置した武官の像。左の方。つまり、向かって右側。
 (15) 矢大神： 神社の隨身門に安置した武官の像。右の方。つまり、向かって左側。

これらは、視点をどこに置くことができるか、あるいは、基準をどこに置くことができるか（何を基準として認識するか（見るか））、という問題に関係している。しかも、日本語の方は「右腕」とか「右に出る人がいない」のように、「右」が上位であるのに対して、中国などでは、左大臣の方が右大臣よりも格が上であったことからも分かるように、左の方が上位に位置している。一般に、「右」の方が格が上になる方が無標であるから、中国のように「左」が格上に

なるのはなぜかは、興味ある問題である。

以上、認識の仕方、視点の置き方が決まっているものと、変化しうるものとがあることを見た。しかも、それは文化によって異なりうることを示唆した。認識のあり方によって、言語表現が変わるというように、両者は密接な関係にある。したがって、逆に言えば、言語表現を見れば、どのような認識をしたものかがほとんどの場合分かることになるのである。

3. 言葉の一人歩き

さて、言語は記号の体系であることも自明のことである。すると、記号の体系独自のシステムをもっているであろうということも、当然予測できることであろう。

言語表現が作られるときには、認識を反映したものであるが、言語自体は認識とは独立した記号としての性質を有しているということも否定できないであろう。言語の独立した性質としては、例えばレトリック (Rhetoric) の技巧などをその一例としてあげることができよう。

さらに、様々な慣用表現（イディオム）も認識とは独立した意味を発展させたものであると言えよう。たとえば、(16)のような場合、(a)の場合のみ、「時間をつぶす」とか「さぼる」というような慣用の意味を発達させているが、これはこの言語表現に限ったことであり、日本の文化的背景に基づく独自の現象である。

- (16) a. 油を売る。
- b. 油を買う。

したがって、(16a)に対応する英語の表現には、このような意味の拡張は見られない（詳しくは Haraguchi (1997) を参照）。

- (17) sell oil.

さらに、生成文法で明らかにされている、言語に見られる経済の原理 (Principle of Economy) のような諸々の原理を始め、言語を規制している原理や規則性などは、認識を規定している原理や規則性とは、直接の関係があるとは今

のところ思えない。

もっとも、認識のシステムを規制している原理や規則性が今のこところ、生成文法で明らかにされているくらいの抽象度でもって明らかにされてはいな。と言うよりも、ほとんど明らかになっていないとすら言ってもよい状態なので、確定的なことはまだ言えない面もある。したがって、言語の原理が認識の原理とどれくらい一致しているのか独立しているのかは、確定的なことは今のこところ言えない。認識のシステムを規定している原理がどのようにになっているかがはっきりした段階で議論すべき面が多いので、ここではこれくらいにとどめて置かざるを得ない。

4. 言語が認識のあり方を縛る

原口・中島・中村・河上（2000）などで強調されているように、ことばは極めて大きな力をもっている。宇宙の規模からすればウイルスのかけらにも満たないちっぽけな存在である人間が、大きくは宇宙の始まりや宇宙のありようから、小さくはミクロの素粒子の世界よりも小さな世界まで、ことばで伝え合つており、かなりの程度理解している。まさに驚くべきことである。さらに驚くべきことは、神の教えも仏の教えもことばで伝えられており、我々の人生そのものも、ことばで律し、作り上げてゆくことができる所以である。

このような驚くべき力をもつことばは、我々の認識に影響を及ぼさないはずはあり得ない。影響どころか、認識のあり方さえ縛ってしまうのではないであろうか。このような考え方には、新しいものではない。すでにサピアは次のように述べている。

- (18) 「言語は...我々に対して現実的に経験を規定するという働きをもつ。...言語形式というものは、我々の外界の見方に対して専制的な支配権を持っている。」 Sapir (1931) 『新英語学事典』

同様な所見は、ウォーフにも他の言語学者にも見られるが、列挙することはしない。

ではどのように我々の認識のあり方を縛るのであろうか。例えば、日本語でよく使われる

- (19) a. よろしくお願ひします。
 b. 高いところからまことに失礼でございますが. . . 。
 c. 腹芸

などという言い方を英語で言おうと思うとはたと困る。(19c)の核になる部分をぴったり伝えるには、筆者の考えでは

(20) *Haragei or holistic decision-making*

とすればよい。このように、(1c)のような語彙に関しては、何とか中核概念を伝えることは可能であるとしても、(19a,b)のようなものは英語では表現不可能であり、表現したとしてもほとんど意味をなさない。このような表現は、日本人のメンタリティを反映した言語表現であり、日本語でしか表しにくい認識である。

同様に、英語における様々な表現も日本語にしにくいものが数々ある。例えば、次のようなものがその例である。

- (21) a. Your patronage is greatly appreciated.
 b. Fuck you.
 c. no rhyme or reason
 d. involvement

スーパーや店などのレシートに書いてある(21a)のような表現を巡っては、かつて誤解のもとに、「生意気だ」というようなことをある人が本に書いて波紋を呼んだことのあるものである。この表現はあえて日本語で対応するものをあげると、「ご愛顧まことにありがとうございます」に相当する表現である。(21c)の rhyme などは、ことば遊びあるいは語呂合わせで用いられているもので、日本語にしようとしても不可能であるから、無視せざるを得ない。類例は日本語でもあり、

- (22) a. 結構毛だらけ猫灰だらけ. . .
 b. 馬の病氣で品が悪い。

下線部は遊びであるから英語にはできないし、する必要もない。ことばが認識とは離れて一人歩きしているか、ことばが認識のあり方を縛っているのである。

ことばが認識のあり方を縛っていることは、もっと組織的に考察すべきであるが、ことばのシステムに従って認識の仕方が規制されてくるのである。言語が認識のあり方の反映であると同様に、認識自体が言語に規制されているのである。したがって、英語では

(23) **brothers and sisters**

と言うのに対して、それに対応する日本語は、

- (24) a. 兄弟姉妹
b. きょうだい

のようにならざるを得ない。言語が認識のあり方を規制しているからである。

5. むすび

以上、小論では言語と認識に関して、(1)の3つが作用しているということを見てきた。小論は言語と認識の関係についての組織的研究の火付け役にすぎない。したがって、本格的な論考はこれからであり、もっとシステムティックに考察すべきところが残されている。しかし、その目指しているところは明らかであると思う。

我々の周りの現象は、すべて相即相入の関係にあるから、個々の関係を取り出して明確にすることは極めて難しい面を含んでいる。しかし、言語と認識に関して、その入り組んでいるものを解き明かして、その性質を明らかにするのが言語理論を研究する我々のつとめである。相互に絡み合った糸を解きほぐして、その関係のあり方を明らかにすることは、例えば、複雑な波形をしたものを作成して、いくつかのサインカーブからなることを明らかにすること似ている。

我々の試みは、複雑な波形がどのように分析できるかを追求することによって、複雑なものが規則的ないくつかのサインカーブの組み合わせからなることを明らかにすること並行的である。言語と認識の相互関係のあり方も、入念な

研究によって、明確な姿を明らかにすることが、いずれはできるはずである。ここでの試みは、そのための小さな第一歩である。今後の研究によって、言語と認識のあり方を徐々に解きほぐしてゆきたい。

参照文献

- Haraguchi, Shosuke (1997) "Cognitive Structures and the Lexicon," Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita, and Shuji Chiba (eds.) *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday.* 849–54.
- 原口庄輔・中島平三・中村捷・河上誓作（2000）「ことばの仕組みを探る——生成文法と認知文法」東京：研究社。
- 大津由紀雄（2000）「言語の認知科学」明海大学大学院応用言語研究科第3回セミナーにおける講演。
- Sapir, Edward (1931) "Conceptual Categories of Primitive People," *Science* 74, 578.
- 山梨正明（1995）「認知文法論」東京：ひつじ書房。